

江戸時代の田植歌研究

— 『出雲国神門郡山口村田植歌』について

飯島 一彦

獨協大学国際教養学部

マテシス・ユニヴェルサリス 第十三卷 第一号

二〇一二年一月三十一日 発行

江戸時代の田植歌研究

— 『出雲国神門郡山口村田植歌』 について

飯島 一彦

中国地方山間部に近世初期から伝えられていると考えられる田植歌は、大きく分けて安芸・石見の山間部に残された、いわゆる『田植草紙』系田植歌と、備後・出雲・備中の山間部に残されたいわゆる大山筋系田植歌の二種類に大別される。これらの地方ではかつて「花田植」とか「嘩し田」等と称された儀礼的な田植え行事が盛んに行われ、現在でも少数が文化財指定を受けて残されているが、その際に歌われる田植歌が盛んに記録（サゲと称される歌役が職掌上書き残したものが多くと考えられる）されて残されている。

田植歌自体は能狂言などの他の芸能に撰取されて歌詞が残された場合もあるし、時折数ある「農書」の中に記録されることもあり、また遡れば『枕草子』の作者によって書き留められた歌詞もあるが、そのようなものは数の上から見れば零細で、比較すれば近世期から明治時代まで盛んに書き残された中国地方の田植唄本（実際に歌うための歌詞の手控え）が多数に上ることは希有なことと言わねばなるまい。

田植えという儀礼性の強い農作業に関わる歌謡である田植歌についての研究が始まったのは遅く、『日本歌謡集成』巻五に『田植草紙』の翻刻が世に出された（昭和三年）からと言って良い。その後同じ底本（実際は東大国文学研究室に残された謄写本であったが）を用いて日本古典文学大系『中世近世歌謡集』（昭和三四年）におさめられてからは日本古典文学の一角を占めることも認められるようになる。

もつとも、明治期の『俚謡集』（大正三年発行、収集作業は明治三八年から）等による民謡集成や、二十世紀に入ってから民俗学的興味の高まりによって郷土への視線が強まると同時に、各地の郷土誌に様々な記録もなされたが、研究としては第二次世界大戦後、特に昭和三十年代になって「爆発的な研究成果」（竹本宏夫著^註『田植歌の基礎的研究』の金子金治郎による序文）が、『田植草紙』系の整然とした組織を持った田植歌が研究の中心対象として取り上げられ続けたことによって続々と生まれ、歌謡研究の世界では田植歌研究は大きな位置を占めるに至った。しかしもう一方の大山節系田植歌の研究は、それを孤高に、しかも高いレベルで研究し続けた竹本宏夫の独擅場と言つて良く、まだまだ研究は半ばであると言つても良いだろう。^注

平成二十三年初春にさる書肆から手に入れた『出雲国神門郡山口村田植歌』は、江戸時代後期に、出雲国神門郡山口村（現在の島根県大田市山口）に住した人物が記した、同村で歌われていた田植歌に関する注釈書である。研究としては現代と比してはもちろん、当時の国学等一般の研究と比しても稚拙と言わざるを得ない部分もあるが、同時期の出雲大社社家（国造家）の出身であり宣長門下の国学者として名を馳せた千家俊信を中心とする出雲国学圏とでも称することが出来る交流の中で生まれた書と言つて良いことが序文から知られる。記された田植歌群は、歌われた場所が明確であり、かつ田植草紙系田植歌圏に属する石見国と大山節系田植歌圏の出雲国の境界にあつた（かつては関所があつたという）ことから見て興味深いものであるし、単なる歌詞の書留、伝承の記録として考えでも貴重な物である。

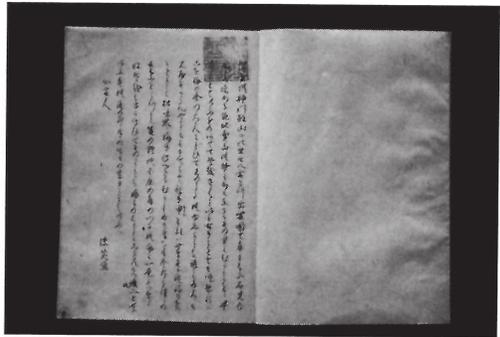
本書の筆者は、山口村に伝えられた田植歌一首毎に三瓶山の神に対する信仰心を基にした解釈を記した。田植歌が信仰心に基づく強い儀礼性を持つていることは、すでに柳田国男が『民謡の今と昔』（昭和四年、地平社、『定本柳田国男集』第十七巻所収）で強く指摘していたことであり、臼田甚五郎が『歌謡民俗記』（昭和一八年、地平社、『臼田甚五郎著作集』第四巻、平成七年、おうふう、所収）で実際に中国地方山間部を歩き、採訪調査の結果として存分に例示したことであるが、『田植草紙』の研究や神楽歌などの他の歌謡の研究、および日本各地における民俗歌謡に対する調査が多数行われたことよつて、研究者の間では二十世紀半ばを過ぎてようやく明確に意識されるようになってきた成果である。その点では、本書においての成果は少なしとはしない。むしろ現在の研究レベルから言えば、解釈という点では古色蒼然としているが、『田植草紙』以外の田植歌の解釈・注釈など、右に掲げた竹本宏夫の業績以外にはまったくなきに等しいと言つて良く、少なくとも、すでに江戸期にこの地方の田植歌の研究がおこなわれていたというだけでもないがしろには出来ないと考えられる。竹本氏が数々紹介した唄本にも本書の紹介は無く、知られていない文献であると思われるので、ここにまず翻刻して示すことにする。

『出雲国神門郡山口村田植歌』の書誌

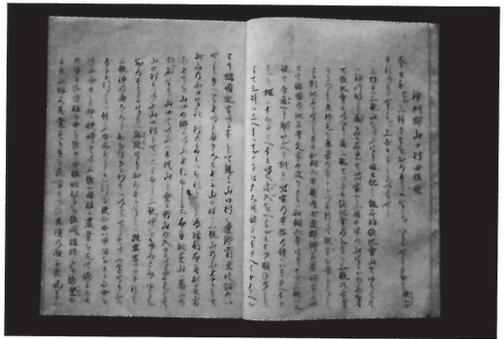
この稿の筆者が手に入れたものは、本書の原本ではない。本書の著者は源英盈なる人物だが、序文によれば文政二年閏四月に欄筆した本文を、後に永福なる人物が筆写したとおぼしき写本である。三丁裏と四丁裏にある頭注（★印）よつて場所を示し、頭注の文章自体は後に示した）、および九丁表にある書き入れ（本文傍書）から、それと知れる。本文はすべて一筆で永福自身の筆であろう。

現在の本書の体裁は、縦二五・九cm、横一八・九cmの半紙四ツ目袋綴、本文墨付一一丁。一頁一二行を守り、細字で記される。一丁オに横山なる人物の藏書印が押される（写真①参照）。序文に文政二年と記されるが、奥付・書写の類は一切無い（写真②③参照）。紙質・墨色から見て、書写もさほど年代は下らない時期と察せられる。装幀は新補のもので、各丁には多少の虫損が認められるが、丁寧裏打ちされていて目立たない。

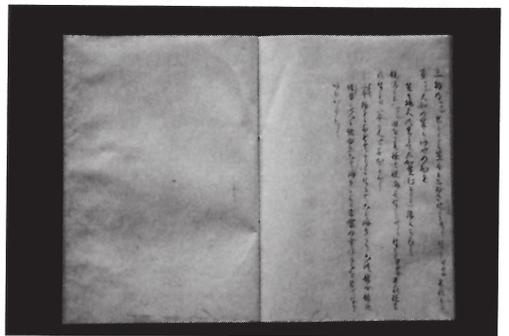
表紙に題箋はあるが、題は記されていない。『出雲国神門郡山口村田植歌』という書名は書肆の売り立て目録に出ているもので、本書が納められていた帙には問題が記されているが、本文とは別筆の稚拙な書体である。本来は



写真① 『出雲国神門郡山口村田植歌』 表紙見返と本文一丁オ (序文)



写真② 『出雲国神門郡山口村田植歌』 本文一丁ウ、二丁オ



写真③ 『出雲国神門郡山口村田植歌』 本文十一丁ウ、裏表紙見返

現在表紙見返しになっている本文と同紙の半紙のみが表紙としてあったものかと思われるが、ただし題は記されていない。従って本書の題名は本来ならば内題によって『神門郡山口村田植歌』とすべきだが(写真②参照)、出雲国を冠した方が内容がよく理解されるので、書肆の判断に従った。

凡例

一 翻刻に当たっては、変体仮名は現在通行の字体に改め、漢字については異体字もふくめてできるだけ原文の表記に従い、原文の字体を尊重した。

- 一 田植歌の歌詞は二行に分けて記され、解釈はその後に二文字程下げて記されていく形態がきちんと守られているので、その再現に努めた。割り注等も原文に従った。各行についても原文通りに翻刻してある。
- 一 判読の難しい字は●で示した。書写の際に誤写をして上から書き直したとおぼしき部分があるが、書き直した字が読める場合はその部分を□で囲んだ。
- 一 本文には濁点は附されていないことが多いが、まれに記されているものもある。原筆者によるものか、書写者によるものかは分からない。これら濁点についても原文の表記に従った。
- 一 本文中には句読点の類は記されない。しかし内容の区切りを示す小圏点がまま存在する。句読点と紛らわしいので、翻刻では○で示した。
- 一 本文にはわざと字間を空けたとおぼしき部分がある。それもそのままに空白を置いて翻刻した。

『出雲国神門郡山口村田植歌』翻刻

(表紙) 題箋アリ、ただし題名ナシ

(表紙見返) 余白

(以下本文)

出雲の神門郡山口の里は八雲たつ出雲國と角さはふ石見の
國との境なる佐比賣山の禁になも在けるその里にむかしより早
苗うたといふものありてそをきくにいと古きうたともあしめれば
こを梅の舎の大人にとひてそのうたのゆゑよしを誰しの人も
見やすからんやうにときてよとねき申ければやますかのねもころ
にさとし松吹嵐ふき傳へたるむかしのさまをも今のうつゝの
言葉にうつし夏の野の小鹿の角のつかのまに一卷とはなり
ぬそをよるこぼひてそのよしをふみのはしにしるす文^國とせと
いふ年の後の卯月の生日の足日にかくいふは

出雲人

源英盈

「一オ

神門郡山口村田植歌

今日もヤアレ三拝さまをおろそうかなうさいか、せうかなう狭小女^{サウトメ}

それいかゞせうかヤレ上吉日にうたいませう

三拝とは三瓶山をいふなり風土記に飯名郡佐比賣山とありて今
は神門郡に属^{ツケ}けり石見と出雲と二國の堺の山なるがゆゑをも
て佐比賣といへり後三瓶といふは佐比賣の三言を三瓶の字音
にうつし恵杵毛を惠曇の音にうつするにて假字^{カナ}を音にうつし
たる例地名に多しそは和銅六年畿内七道郡郷名著^{カサ}「好字」とあ
りて諸国の地名等文字の改りたるは和銅六年なりさて三拝は三
瓶と音通^カへり即^{ヤカテ}サンベト訓るは出雲の卑俗の辞はハイヲヘイト
イヘリ蠅ハイなるをヘイト唱へ這入^{ハイル}をヘイルとイフ類ひ多し
よて三拝は三ヘイニナルナリ江戸人の辞にハイヲヘイトイヘル
アリ諸国訛言ある事にて殊に山口村は邊郷窮里の詞のい
やしきはそもあるへきことぞよ山口村は三瓶山のふもとにて

「一ウ

此山の山口なれば村の名とはなれる　り嶋根郡布自積美山の
ふもとを山口の郷といふもおなじこと也布自積美山は高山の
古名^{ムカシノナ}なり山口といふはその山に登る時山の入口といふ意也よて
山口村とはいふ山口村にてはこよなう三瓶ノ神をたふとみける也
おろそうかなうは無^{オロソクナク}疎^{オロソクナク}なりおろそかなくは疎畧^{オロソクナク}思フコトなく
三瓶神の御こゝろにかなひけるわざはいかゞせうといふ意なりおろ
そうと引くは歌ふゆゑそうとは引也○狭小女は早苗をとる小女を

いふ西土に挿秧婦といふ佐は田植る農業を凡て佐と云そ
の苗を佐苗植る女を佐少女植始むるを佐開^キ植終るを佐登^{ノボル}な
と云ふ扱又其業する月を佐月といひ其頃の雨を佐乱と云ふ
なり又新猿樂記には五月男女とも書りこゝは佐少女にて

「二〇

その田植る女にいひかけたる辞也○いか、せうかヤレなにといた
さうかと云意○ヤレと云ふは語辞^{カタリゴトハ}なり俗にヤレサウジヤ○ヤレカウセ
ウなどいふヤレなり○上吉日といふは最上の吉日^{ヨキキ}といふ義
歌の意は今日^{ケツ}は田植るとて早苗を植始むるは三瓶の神の
御心にならひて神の御恵みをうけすしてはなりかたし
いかゞいたしたらは神の御心にならひ神の御恩^{ミコノオン}頼^{タノ}を
蒙らんと佐少女^{サウトメ}にとひかけそれいかゞせうかとかへして
歌ふが詠歌の常也今日は最上の吉日なれば田植歌をうた
ひませうと云ふより下にあるいろ／＼の歌をうたひ出^ス序也
君がためヤアレ春ののに出て若菜つむナウサ／＼ナウ早少女^{サウトメ}それ若な
つむヤアレ我か衣手に雪はふる

「二一

此御うたは光孝天皇の御歌なりいと尊き御歌をうたひ
けるは田植るも根本^{コソ}君に貢るを本とする義にて皇神等も君
に稲穀^{イネシタマツリクマ}を依^{ヨシ}奉^{ホウ}給^{タマ}とて守り給ふ也そのよし延喜式の祈
年祭の祝詞に見えたりされは君がための御製を意義をかへ

てこたへるなりこの御歌は小倉百首にもあればよく人の常に
おほへたる歌なり古今和歌集には仁和の帝みこにおはし
ましける時に人に若菜を給ひける御歌とあり御歌の意は
若菜を春の野に出給ひて摘給ふ時春の雪ふりかゝりいと
たへがたき●をもいとひ給はで君^{ソノ}がためにとてつみ給ふ
の意君は若菜を給はる人をさす辞むかしより歌には
向ふの人を上下に通はし君といへりその君の意とは義
をかへてうたふ人の為にいふ君は大君たるへし雪は豊
年のしるしといふことはをも含みて雪とあるを早苗とる人のこと
ほきいへる意もあるへしよしその意なくとも天皇の大御歌をう
たひけるは民草は君をたふとむ意をしらせたり

「三〇

三拝のヤアレたなりし月は大月かナウサ小月なら狭少女それ小月か
ヤアレ大月ならは男子なり

★ 田成^{タナリ}し月は稲成るの義なるべしこは人の妊^{ハラム}るをたなりしと
いふによそへていへり大の月小の月をもて生れ出る子の男女
を考る事ありそれによそへて早苗の生れ立て稲^{アカラメ}の熟るを
ことほきたり

三拝のヤアレ胎内こもり九の月なうサ／＼早少女^{サウトメ}それ九つきやれ十月
なれば生レくる

胎内こもりは婦人の姫て十月にみちて子うむを早苗のそだ
つにたとへたり又富士山などに登山する人の御胎内といふ詞い
まもいへり三瓶山によしありけなり

「三ウ

三拝のヤアレ父ごは誰ぞと尋ぬればなうサく／＼なう狭少女それ尋ればヤアレ
天から天主とおほえたり

父ごは父御なり天からは高天原の天御中主神の御恵沢にて
五穀萬物の生そだつことなれどとりわきて早苗は天津神の
みめくみをもて生たつをいふ天主といふは神道者の素盞
鳴男尊の御事を素尊ととなへける例にて天御中主の神を

天主とはいへるなるへし父御といふは父の恵にて子たるものは
立ゆくによそへ天御中主神の恵みにて早苗の成れるをいへり
三拝のヤアレとりあけ乳母誰やらんなうサく／＼なう早少女それ誰やらん
なうサ宇佐八幡の母御なり

「四オ

宇佐八幡は山口村の氏神の社にまつれはいふなり宇佐
八幡宮を山口村に祭りしは元亀二年辛未年石州羽根村の
富永兵庫頭造營せし事物に見えたり祭り九月九日流
鎗馬又は獅子舞供物を神前に献りて祭ることむかしより
なり山口村の鎮守の神ゆへ歌に宇佐八幡とはいふなるべし
母御とは神功皇后を申奉るなるべし此神は八幡宮に合祭ける

よしなれはいふ○歌の意は早苗を出生の児にたとへて取あけ
乳母の赤子をそだてたるがごとく此神の守りによりて早苗
の生たつをいへるなるべし

★ 三拝のヤアレ生湯の清水とこ清水なうサとこ清水なう早少女それ
どこ清水のサ大和国の岩清水

「四ウ

岩清水は山城国雄徳山の岩清水に移し奉るは貞観元年
年冬十月八幡神移三男山と元亨釈書に出たり行教宇佐
より勧請し奉るなり又三代実録にも石清水八幡宮護
国寺と見え大安寺縁起文にも行教和尚以三其納衣一鎮三于
此一以爲三石清水寺伽藍神一隸三于和州大安寺八幡一とあるなり
もと微になりしが源義家より源家のために崇重せられ

まして當時のことくはなりたるなり行教は武内宿祢の後也
扱八幡宮へ人皇十六代應神天皇を祭り奉り神功皇后をも
祭れり○三ふ湯の清水とは産湯なり洗兒湯をいふ紫式
部が日記に皇子誕生の條に湯まるる其桶すえたる臺など皆
白キおほひしたりと見えたり姓氏録に淡路ノ瑞井の水奉灌
御湯とあり○この歌の意は早苗は水の養ひを第一とするゆゑ人
の誕生と稲の早苗とをよそへたり人うまれて産湯をもて
身にそゝぎ早苗も水をもて根をそゝぐかくその早苗は水は産

「五オ

湯にあたるなれば其水は山口村八幡宮の神の恵みの水にして
苗ほそだつなれば八幡宮は岩清水ゆゑ岩清水とはいへり大和國
といふは男山岩清水八幡宮は山城國綴喜郡なるを大和國と
しもいへるは日本の國といふこゝろにておほろかにいへるか又
は田舎人の山城大和のけちめなくいひそめたるか

三拝のヤアレ産湯のたらひはなにたらひなうくサく早少女それ何たらひ
ヤアレ白かねたらひこかねのそ

たらひは盥の字をよめりてたらひと云ふ義なりテア反こと
なる手洗の義をもて名けたり椽手洗小手洗と類聚雜

要に見えたり○この歌は前に産湯をいひこゝにたらひ
をいへり早苗を生れたる子にたとへ田の面の原をたらひ

「五ウ

によそへたりよて田の地面をことぶきて白銀のたらひ黄金
の底といひて言霊の幸はひをのべたり

三拝のヤアレ産着の小袖何小袖ナウサく早少女それ何小袖ヤアレ白着の
小袖肌にめす

この歌は早苗の生立てかぶさしを産着にたとへたり

三拝のヤアレ乳付の母御たれやらんなうサく早少女それ
誰やらんなうサ正八幡の母御なり

早苗を赤子にたとへたりその赤子を育めるは乳付なり乳付

の兒をそたてたつることく山口村の鎮守正八幡宮の母御
神のめくみにてこの村の田地にそだつ早苗といふ義也

三拝のヤアレ母御は誰そと尋ぬればなうサく早少女たつぬれば
ヤアレ十三河原の蛇のめくみ

「六オ

前にいふことく児は乳にて成長し早苗水にて茂生する也

その水をつかさどり給ふは十三河原の蛇のめくみといふ義也十
三河原といふは山口村に藤本明神谷と云ふ瀧あり高サ十間餘り
ありて水至極冷水也夏も瀧の水冷なること氷のごとしいへり

この所をいふなるべし瀧本明神といふは淤加美なるへし蛇
は古事記に闇淤加美とある類にて日本紀には龍を於箇美と
よめる此神は雨を物する神にて萬葉二卷吾岡之於可美尔

言而令落雪之摧之彼所塵家武とあるを思ふに雨は於可
美のつかさどり給ふ蛇は於箇美の類なれば雨をつかさどり
給ふ神なり雨のめくみにあらざれば田に早苗の生たつ

ことはならぬゆゑ於箇美の所為ゆゑ蛇のめくみといへり

三拝のヤアレ生は何國陸のくになうサく早少女それ陸の國

「六ウ

ヤアレ千原野辺の笹原に

陸の國は陸奥をいへり萬葉十四卷にも美知能久とあり能に於
の韻ある
和名抄陸奥三知乃於久とあり古今集頭注に云ク陸

奥と書てみちのおくのくにとよむなり哥にはみちのおくとよむを畧してみちのくとも書り世俗にみちのくにと申すは哥の詞に非すましてむつの國と申すは無下のこと

なり陸と云文字をむつと云へはと思へり陸をばみちとよむなりと云り陸をむつと云とは數の六に此字を借用ることありま

とに此國の名の美知を牟都と訛れるは是よりぞまきれつ

らむ又陸といふ字を書たるは陸の字に似たりさてむつといふ

よりのことなり誤なりみちのくといふべし奥は口に對へ

云稱にて道口道後に同じ京より行に初の地を道の口と云フ

「七オ

路ノ後とも奥とも云り此ノ國は東の極に在て實に奥なり筑紫にても

大隅薩摩を奥の國と云ること檜垣家の集に見えたりさて奥の郡

と云フは源氏物語若菜卷に播磨國ノ内下て此國の奥郡と云ること

あり陸奥國は稲穀のことになくみのりよくさかえゆくをもて

いへり又陸奥ノ國の千原野辺の笹に笹の自然と茂生することく

に今植る早苗の生る意をよそへことぶきいへり

三拝のヤアレとし始りの朝茶をはヤレくなく早少女それ朝茶をはヤアレ祝や祭れ年神に

朝茶とは正月茶を大福といひて年始のことふきとせり茶は一服二

服といふ辭のふくといふをとれり物の名に寄て祝賀の辭

とするは皇國のむかしよりのならひにてふゞきを富貴とし

「七ウ

又はめうがを冥加とする類にて茶を大福といふなり年は

稲のことをとしといへり大年神御歳神は稲を守り給ふ神なり

年とは初春に種子を水に浸より冬をさむるまで一とせをふる

故なりさて年の字もと季の省文穀の名也左傳正義に年

歳載祀異代殊名而其實一也とあり祝詞式に祈年祭あり

二月四月に祭ける令仲春祈年祭義解欲令歳災不作時令順

度即於神祇官祭之故云祈年とあり此祭は雨風時にしたがひ

百の種つものよくみのりさかえゆくを神に祈り給ふ祭なり

それを祈年といふも年は稲のことをいへばなり年の始に此御年

神を祭るをこたへり

三拝のヤアレしゆ參らする八重ひさげなうさくなく早少女それ八重

「八オ

ひさげヤアレ長柄の銚子すみのこしゆ

こしゆは神前に神酒を献り祭るをいふ也ひさげは資暇録

偏提とあり拾遺記元和之間謂之注子仇子良悪同鄭注名去柄

安繁名偏提といへり神宮雜例に提と記せり海人藻茶提は右

の手をもて左の手を寄と見えたり清少納言枕草子にひさ

げのえとあり神に神酒を献る時用ふるに長柄銚子より

つぎけるをいふ酒鑑也すみのこしゆとはすみざけをいふ清酒を

いふ濁酒に對り神を祭るには御食料物ノ神酒御衣を献り
て祭るゆゑ此次の歌に衣服の縫初を出せり
三拝のヤアレ御裝束の縫初をなうサく／＼なう早少女それぬいそめはヤアレみ
すやの針で縫初る

縫初は正月はしめ縫初をいふ也針は和名鈔ニ縫衣具也と見え
みすやはりは京三條通のみすやをいふ歎名物也縫初の。
をまつ に奉りてこの里の三瓶の神の手向の幣を奉をいへり
三拝のヤアレ夏かたひらのおもひ立なうサく／＼なう早少女それおもひ立ヤアレ
麻なる布を八つとたち

衫はかたひらと云は一重より云ふ名なりかた／＼の一重を用ふからいふ
名にて裕に對ふ名也布を八つとたちは布もて青幣帛として
神に御かたひらの料に献ることあり

三拝のヤアレ乗たる駒の毛色をはなうサく／＼なう早少女それ毛色をはヤアレ大
黒小黒名馬なり

駒は尔雅經に小馬也とあり神に手向するもの、内神馬を引ことあ
り諸社に其例多し又一説に天平年中に信濃国より献り神馬黒
馬尾髮白しとあり又祈雨時は黒馬献るともいへり
よう見事なうサうひたき山の宮作りなうサく／＼なう早少女
それ宮造りヤアレこれ神のやしるなり

「九オ

宇比多岐山は神門郡なり宇比多岐山の神と三瓶の神とよし
あること、見えたり宮作りはいとうるはしくつくりたるをほ
めた、へたり

きのふからヤアレけふまでかけし黒鯛をなうさく／＼なう早少女それ黒
鯛をヤアレきはや尺のまないたで

出雲風俗にて正月は歳神にかけ鯛とて鯛をそなへ祭ることあ
りそれをかけといへり黒鯛は彫魚とかけり和名鈔食経云ク
彫魚與レ鯛相似而灰色とあり太比は平也鯛の類ひら
にたいらかなるよりいふきはやはとは割は彫魚を庖丁
にてきること也料理するなら大彫魚ゆゑ尺もある真名
板にてといふ意その切初三瓶神に献るをいふが此次の
歌につ、けたり

「九ウ

黒鯛のヤアレ其切そめをたれまゐるなうサく／＼なう早少女それたれま
ゐるヤアレまつ三拝に參らする

彫鯛を先三瓶に献るは神を敬ふ意にていとむかしより
の式と見えたり

三拝のヤアレ御宮の内の宝はなうサく／＼なう早少女それお宝ヤアレとつ
こにしさんこにれいしやくじよう

御宮の内の宝とは三瓶の神の宮の内の内殿をいふとつこと

は獨^{トコ}鉦なり三鉦ともに佛具なり獨鉦は和名鈔云く大日
經疏云獨鉦三鉦とあり密家の具なるよしにてむかし法
師の此山にて神を祈り獨鉦三鉦鈴^{シレンヤウ}錫杖を奉りし事
ありと見えたり

三拝のヤアレ御宮のまはりをめくりしがなうさくまはりしがなう
早少女それまはりしがなうサ三まはり半と覚えたり

三瓶の神の坐所をめくりしが一日に三回^{メダリ}半にてその日がくれるほど
な廣きをいへり

おろし

お宮出て早少女鳥井を越て

古へは御門といへり中古より三瓶山の御門をとり井とはいふ也

三拝のヤアレ御宮のまへの切石はなうサくなう早少女それ切石はなう
サどこなる石かヤアレ見事

三瓶にある御宮のあたりの石をほめた、へたり

三拝のヤアレ御国めぐりのとも勢ひはなうサくなう早少女それとも
勢ひヤアレ三百余人とおほえたり

此神出雲の国中をめぐり守り給ふがその時の御供^{ミトモ}者の神

を人によそへたり風土記に三百九十九柱とあるによるか国中の神
ことくく此三瓶の神とおなしく出雲ノ国を守り給ふをいふ

「十ウ

三拝のヤアレどれからどれへ御通りなうサくなう早少女それお通り
ヤアレ津の国越てみの、国

これは越といふ辞にて関をしらせたり摂津の国須磨の関を
越て美濃国不破の関までも越給ふをいふ関をやすく越

るは治る御代のしるしをいへり戸ざ、ぬ御代ともいふは大
平の事なり

三拝のヤアレめしたるこしは何こしかなうサくなう早少女それ何
こしかヤアレこがねの御こし玉の鈴

三瓶の神の御めぐりの輿は金^{コウカネ}を臺し玉をもてかざる玉

のこし玉鈴のたぐひにて神輿のうるはしきをたとへたり

三拝のヤアレめしたる笠はとこがさなうサくなう早少女それとこ
笠ヤアレ大和の笠にあやのひも

笠は旅人の具にて大和笠むかしは殊によるし

祝ひにはヤアレ田をこそ植て祝ますなうサくなう早少女それ祝ま
すなうサ二本^{フタホ}うへて千本とから

二本植るに千もとからになるとことぶきけりこの歌は歌の

結^{ユヰ}目にいへる歌ゆゑことぶきたり言霊の幸ひけるをもてなり
あなかしこく

「十一ウ

《原文頭注》

(三丁ウ)

永福云大小月を以て男女を
考るはさることなれどこゝは稲に
も男稲女稲といふありて
女稲はもみいと多しと
いへり其由謂を以ていへる
なるへく思はるゝ

(四丁ウ)

永福云清水はすみ
水の意也

(以上、翻刻終わり)

【注】

- 1 『田植歌の基礎的研究』(昭和五七年、風間書房)、竹本宏夫には他に『日本歌謡叢とその小考』(昭和六〇年、桜楓社)『田植歌研究の展開』(平成一一年、おうふう)、等の業績があり、大山節系統の田植歌研究に關しては一人気を吐いている。
- 2 田植歌研究史についてはもう少し詳細に、小野恭靖編『歌謡文学を学ぶ人のために』(平成一一年、世界思想社)、の「田植歌」の項(199~214頁)で述べておいた。

A study of “*Taue-uta*” in Edo era

IJIMA Kazuhiko

“*Izumo-no-kuni Kando-gun Yamaguchi-mura Taue-uta*” in my own library, is only and first annotation of *Daisen-Bushi-Kei-Taueuta* in Edo era.

But indeed, modern annotation of *Daisen-Bushi-Kei-Taueuta* was only accomplished by TAKEMOTO Hiro-o. There is nothing before his achievements.

The book was written by MINAMOTO Mitsuhide, inhabitant of Yamaguchi village.

His devotion for Mt. Sanbe forms the basis of construction of his annotation. That is old style of KOKUGAKU.

But it was precious study as first annotation and text of *Daisen-Bushi-Kei-Taueuta*, in Edo era.